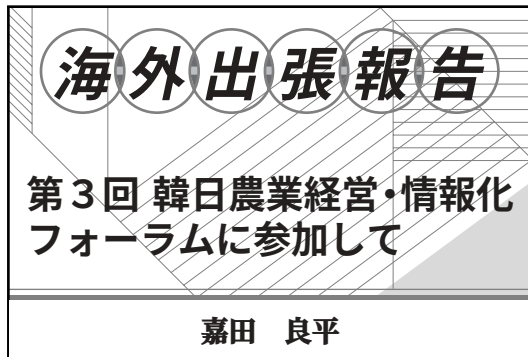




2003年6月25日から27日の3日間、韓国京畿道水原市にある農村振興庁国際会議室において、「第3回 韓日農業経営・情報化フォーラム」が開催され、私も参加する機会を得た。このフォーラムは日本と韓国において年1回交互に開催されており、今年は韓国での開催となったものである。韓国側は農村振興庁の農業経営情報官室、日本側は農業技術研究機構の中央農業総合研究センターが事務局を担当しており、今回のフォーラムもこの両者による共催の形で開催された。参加者は韓国の政府機関の担当者および大学の研究者が中心であり、2日間でのべ約150人（日本側からは8名）が参加した。

韓国農村振興庁は農業の技術開発と普及事業を担当する重要な政府機関であるが、今回の全体テーマは「開放化時代における農業発展のための農業経営および情報技術の活用」であった。農業経営戦略と情報化対応という相互に関連する二つの大きな課題について、両国の研究者あるいは専門家からそれぞれ報告と討論が行われた。

第1の課題は、グローバル化時代における農業経営のあり方である。その趣旨は、農産物・食品の市場開放と国際競争がますます加速するなかで、農業経営がいかなる対応をすべきか、そして必要かつ効率的な政策支援のあり方について検討することであり、類似の課題を背負っている日韓両国ならではの真剣な討議が行われることとなった。

第2の課題は、国をあげて情報化を推進している韓国において、他産業と比べると相対的に立ち遅れている農業・農村分野での情報

化（IT戦略）をどのように具体的に推進すべきかが討議された。ここでも日本のノウハウや経験から学ぶという韓国側の姿勢が強く感じられた。国家戦略として、まさに国を挙げて農業分野にもIT化を推進しようとする韓国の強い熱意がとくに印象的であった。

つぎに、各課題ごとのプログラムについてテーマおよび報告者（所属）について概観しておこう。第1日目は、開会式のあと、午前に「農業環境変化と農業経営の発展方向」成晋根（忠北大）、「日本の農業生産調整と新たな政策方向」嘉田良平（農林水産政策研究所）の2報告がなされ、午後には「開放化時代の日本の農家の経営対応戦略」黒河功（北海道大）、「農業経営会計管理の効率化方案」金貞注（建國大）、「農産物市場開放に対応する農家経営安定化方案」金正鎬（農村経済研究院）など5報告が行われた後、総合討論が行われた。中国や東南アジアからの輸入攻勢による価格低迷など、韓国の農業経営環境はわが国以上に厳しい。高付加価値化につなげるための生産・販売戦略、そして米の生産調整のあり方などの新しい政策対応についても質疑が行われた。

第2日目は、「農業の情報化戦略」を全体テーマとして、計8本の報告がなされ、それぞれ熱心な質疑応答が行われた。主要な課題と報告者を列举すると、「韓国における農業情報化の新たな発展方向の模索」李政宰（ソウル大）、「日本における農業情報システムの開発と情報化推進戦略」二宮正士（中央農研センター）、「農業経営計画設定支援ソフトの開発及び利用事例」南石晃明（中央農研センター）、「日本における食品の安全性と農産物の生産流通改革方案」田上隆一（農業情報コンサルティング）などであった。とくに、日本が現在推進している農業IT化と農業情報システムの構築、そしてトレーサビリティ・システムに高い関心が寄せられたことが印象的であった。

なお、第3日目はポスト会議ツアーとして、どしゃ降りの雨の中ではあったが、丸1日かけて水原市近郊の農産物流通施設を見学した後、全羅北道のIksan市にある「情報化推進モデル村」を訪問し、具体的な農村IT化の推進状況を視察した。